ゴール

Kubernetes環境をローカルで構築し、アプリケーションのデプロイ方法の一種である「ローリングアップデート」と「Blue/Greenデプロイ」を簡単な例で体験する。

(参考) アプリケーションのデプロイとテストの戦略

目次

- ・ゴール
- 目次
- kubernetes環境構築
 - kubernetesのインストール
 - 必ず PROXY設定を初期化
 - Kubernetes有効化
 - 完了状態
 - Kubernetes Dashboardインストール
 - インストール
 - 確認
 - Dashboard管理ユーザー登録とroleのバインド
 - Ingress-nginxインストール
 - インストール
 - 確認
 - イメージファイルのビルド
 - Dashboard画面を起動
 - DashboardにログインするためのTOKENを取得
 - dashboardにアクセスするためのPROXYを起動する
 - dashboard起動
- kubernetesの概念
 - kubernetesクラスタとNode
 - kubernetesクラスタとNode 概念図
 - Master Nodeを構成する管理コンポーネント
 - Dashbord画面で確認
 - Namespace
 - o Pod
 - Pod単体
 - PodのNodeへの配置
 - Podをデプロイ〜動作確認〜削除まで
 - デプロイ
 - デバッグ用Podのデプロイ
 - Pod仮想IPについて
 - SWTESTの情報
 - DebugコンテナからSWTESTの動作確認
 - curlコマンドで確認

- Podの削除
- ReplicaSet
 - マニフェストファイルの確認
 - ReplicaSet生成
 - ReplicaSet削除
- Deployment
 - Deployment/ReplicaSet/Pod関連図
 - 世代管理付のデプロイ
 - コマンドラインからデプロイする
 - リビジョンの確認
- ローリングアップデートとロールバック
 - ローリングアップデート
 - マニフェストファイル
 - アップデートの実施
 - 履歴の確認
 - o ロールバックの実施
 - 切り替え中の状態
 - 履歴の確認
 - 最後に削除する
- Service(blue/green)作成
 - blue/greenデプロイメント
 - ∘ blue/greenサービス
 - デプロイ
 - o 状態確認
 - debugコンテナからアクセスし動作確認
- IngressによるBlue/Greenデプロイ
 - IngressによるBlue/Greenデプロイイメージ
 - Ingress-nginxの状況確認
 - Ingress追加
 - 動作確認
 - 現行バージョンへのアクセス
 - 次期バージョンへのアクセス
- Blue -> Green への切り替え
 - path切り替え
 - 新バージョンへのアクセス
 - 旧バージョンへのアクセス
- 最後に実習環境の削除方法(できればKubernetes環境は破棄願います)
 - Kubertenesリソース削除
 - o ingress-nginx, dashboard削除
 - Docker Dashboardで無効化
 - 不要データの削除

kubernetes環境構築

DockerDesktopからKubernetesを有効化します。

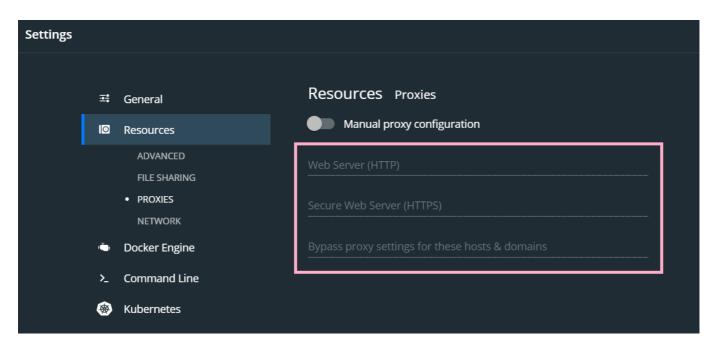
[重要]

社内LAN、VPN環境ではうまく有効化できないので、DockerDesktopのPROXY設定は必ず空にすること。

Kubernetes有効化はiphoneのテザリング環境下、または、自宅のインターネット環境下で実施します。

Kubernetes関連イメージのダウンロード部分で止まり、進退窮まり初期状態にリセットせざるを得なくなります。

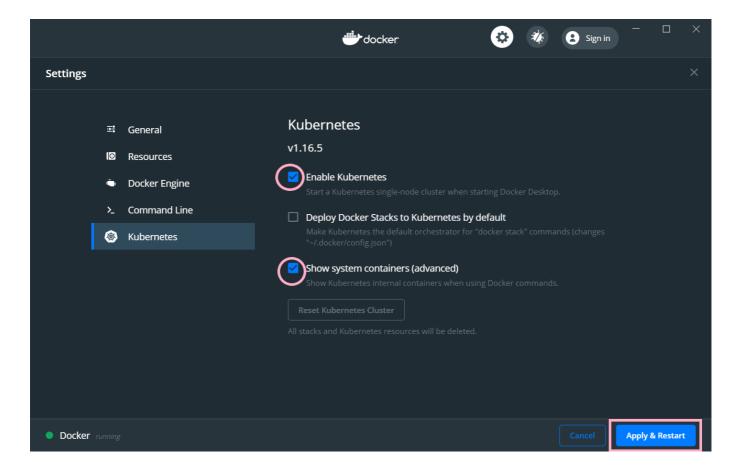
必ず PROXY設定を初期化



SettingsのResourcesでPROXIESは空白にして「Apply&Restart」ボタンを押す

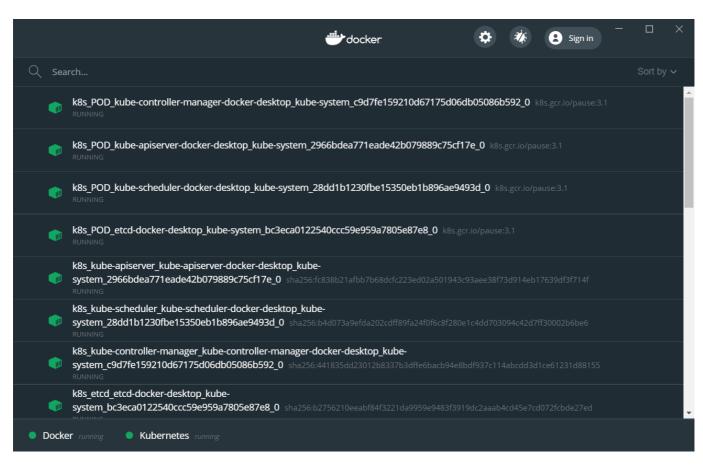
Kubernetes有効化

- Enable Kubernetesにチェックを入れる
- Show system containers(advanced)にチェックを入れる → インストール進捗が分かりやすい
- 「Apply&Reset」ボタンを押す



完了状態

コンテナが全てグリーンになり、画面左下のKubernetesがグリーンになりrunnningと表示されれば有効化完了です。



Kubernetes Dashboardインストール

Kubernetesの状況把握や管理のためのダッシュボードソフトをインストールします。

インストール

パワーシェルを起動し、作業フォルダにて次のコマンドを投入する。

```
> kubectl apply -f recommended.yaml
```

確認

ひきつづきパワーシェルにて起動を確認

Dashboard管理ユーザー登録とroleのバインド

パワーシェルで次のコマンドを投入する。

```
> kubectl apply -f create_account.yaml
```

> kubectl apply -f role_binding.yaml

Ingress-nginxインストール

2日目に必要なIngress-nginxをあらかじめインストールします。

インストール

パワーシェルを起動し、作業フォルダにて次のコマンドを投入する。

```
> kubectl apply -f mandatory.yaml
-----
namespace/ingress-nginx created
deployment.apps/default-http-backend created
```

```
service/default-http-backend created
configmap/nginx-configuration created
configmap/tcp-services created
configmap/udp-services created
serviceaccount/nginx-ingress-serviceaccount created
clusterrole.rbac.authorization.k8s.io/nginx-ingress-clusterrole created
role.rbac.authorization.k8s.io/nginx-ingress-role created
rolebinding.rbac.authorization.k8s.io/nginx-ingress-role-nisa-binding created
clusterrolebinding.rbac.authorization.k8s.io/nginx-ingress-clusterrole-nisa-binding created
deployment.apps/nginx-ingress-controller created

> kubectl apply -f cloud-generic.yaml
service/ingress-nginx created
```

確認

ひきつづきパワーシェルにて起動を確認

イメージファイルのビルド

予め今回使用するイメージファイルをビルド・PULLしておきます。

パワーシェルにて下記バッチを起動

```
> .\build_image.bat

:
:
REPOSITORY TAG IMAGE ID CREATED

SIZE
swtest/nginx latest 8d71d4b00e5f 28 hours ago
170MB
```

REPOSITORY SIZE	TAG	IMAGE ID	CREATED
swtest/api 121MB	v2	51 e06a4c2b89	5 hours ago
swtest/api 121MB	latest	6380831691ba	28 hours ago
REPOSITORY SIZE	TAG	IMAGE ID	CREATED
swtest/debug 8.67MB	latest	<mark>421</mark> bf1f5871d	About a minute ago

Dashboard画面を起動

DashboardにログインするためのTOKENを取得

[重要] 次のコマンドは必ずパワーシェルで実行すること。

```
> kubectl -n kubernetes-dashboard describe secret $(kubectl -n kubernetes-
dashboard get secret | sls admin-user | ForEach-Object { $_ -Split '\s+' } |
Select -First 1)
Name:
             admin-user-token-8db5m
Namespace: kubernetes-dashboard
Labels:
             <none>
Annotations: kubernetes.io/service-account.name: admin-user
             kubernetes.io/service-account.uid: 7b982cb1-97a4-4c83-ae58-
c0514d77d656
Type: kubernetes.io/service-account-token
Data
ca.crt: 1025 bytes
namespace: 20 bytes
token:
eyJhbGciOiJSUzI1NiIsImtpZCI6IlA1SDBab2ozYlZ4cDY4Ry11MXE4WGc5SW5PcmgxY19fYUVFY3NyZ1
pCTVUifQ.....
```

dashboardにアクセスするためのPROXYを起動する

```
>kubectl proxy
```

Starting to serve on 127.0.0.1:8001

dashboard起動

下記URLをブラウザで開く

http://localhost:8001/api/v1/namespaces/kubernetesdashboard/services/https:kubernetes-dashboard:/proxy/

Kubernetes Dashboard

Kubeconfig

クラスターにアクセスするために作成した kubeconfig ファイルを選択してください。kubeconfig ファイルの設定方法や使用方法についてもっと知るためには、 Configure Access to Multiple Clusters セクションを参照してください。

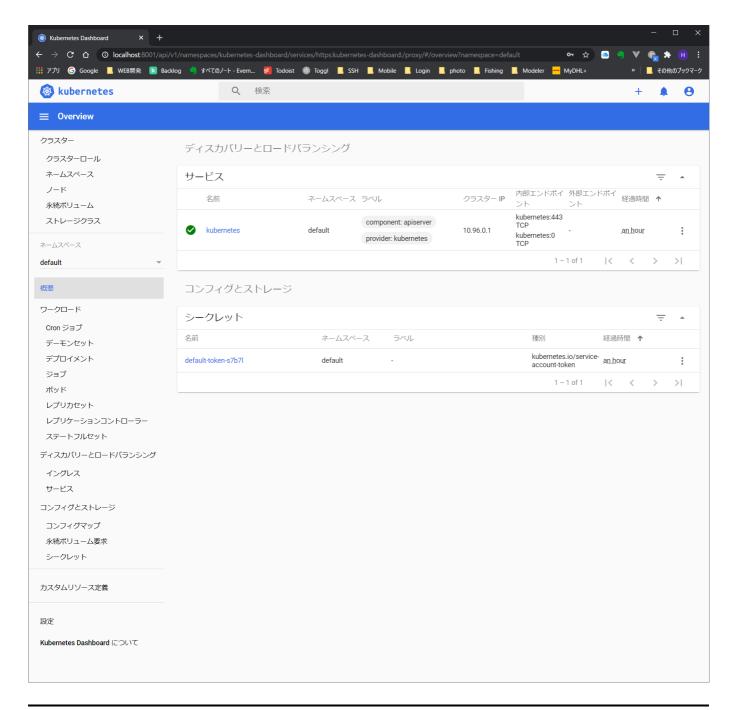
トークン

すべてのサービスアカウントには、ダッシュボードのログインに使用できる有効なベアラートークンを持つシークレットがあります。ベアラートークンの設定方法や使用方法についてもっと知るためには、 Authentication セクションを参照してください。

トークンを入力*

サインイン

- トークンを選択する
- パワーシェル画面に表示されているTOKENをコピーし、WEB画面のトークン部分にペーストする
- 「サインイン」ボタンをクリックする



kubernetesの概念

kubernetesクラスタで実行されるアプリケーションは様々なリソースと協調して動作することで成立している。(コンテナ・オーケストレーションと呼ばれる)

以下にkubernetesのリソース一覧をまとめる。*付は今回実習で体験する。

リソース名	用途
Node*	Kubernetesクラスタで実行するコンテナを配置するためのサーバー
Namespace*	Kuberneteクラスタ内で作る仮想的なクラスタ
Pod*	コンテナの集合体の単位。コンテナを実行する方法を定義する
ReplicaSet*	同じ仕様のPodを複数生成・管理する

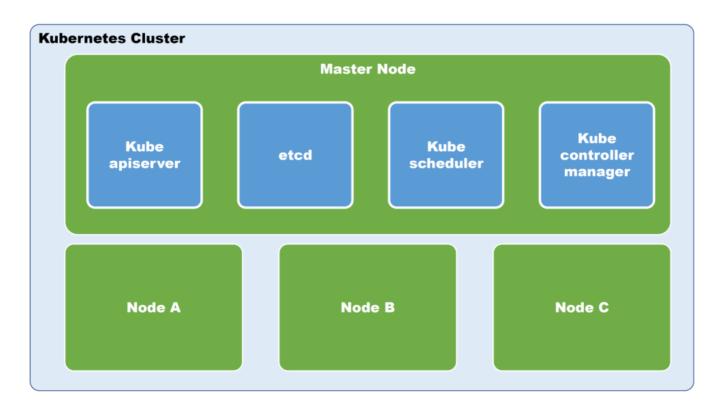
リソース名 用途

Deployment*	ReplicaSetの世代を管理する
Service*	Podの集合にアクセスするための経路を定義する
Ingress*	ServiceをKubernetesの外部に公開する
ConfigMap	設定情報を定義し、Podに供給する
PersistentVolume	Podが利用するストレージのサイズや種別を定義する
PersistentVolumeClaim	PersisitentVolumeを動的に確保する
StorageClass	PersistentVolumeが確保するストレージの種類を定義する
StatefulSet	同じ仕様で一意性のあるPosを複数生成・管理する
Job	常駐目的ではない複数のPodを作成し、正常終了することを保証する
CronJob	cron記法でスケジューリングして実行されるJob
Secret	認証情報等の機密データを定義する
Role	Namespace内で操作可能なKubertenesリソースのルールを定義する
RoleBinding	RoleとKubernetesリソースを利用するユーザーを紐付ける
ClusterRole	Cluster全体で操作可能なKubertenesリソースのルールを定義する
ClusterRoleBinding	ClusterRoleとKubernetesリソースを利用するユーザーを紐付ける
ServiceAccont	PodにKubernetesリソースを操作させる際に利用するユーザー

kubernetesクラスタとNode

- KubernetesクラスタはKubernetesの様々なリソースを管理する集合体のこと。
- その中で最も大きい概念がNode(ホストのこと)となる。
- Kubernetesクラスタには全体を管理する役割のMaster Nodeが少なくとも一つは必要。

kubernetesクラスタとNode 概念図

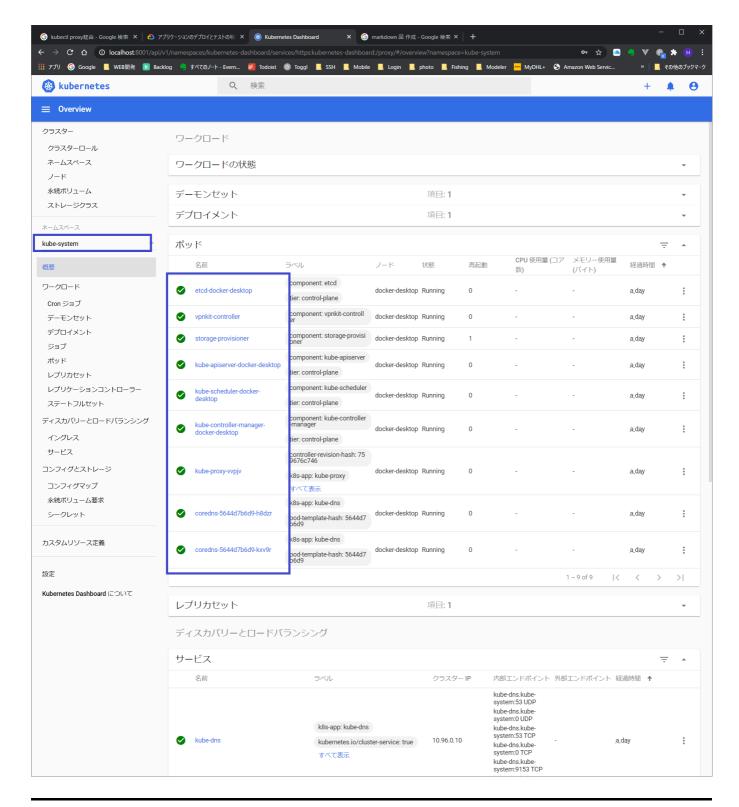


Master Nodeを構成する管理コンポーネント

コンポーネント名	役割
kube-apiserver	KubernetesのAPIを公開するコンポーネント。kubectlからのリソース操作を受け 付ける
etcd	高可用性を備えた分散キーバリューストア。Kubernetesのバッキングストアとし て利用される
kube-scheduler	Nodeを監視し、コンテナを配置する最適なNodeを選択する
kube-controller- manager	リソースを制御するコントローラを実行

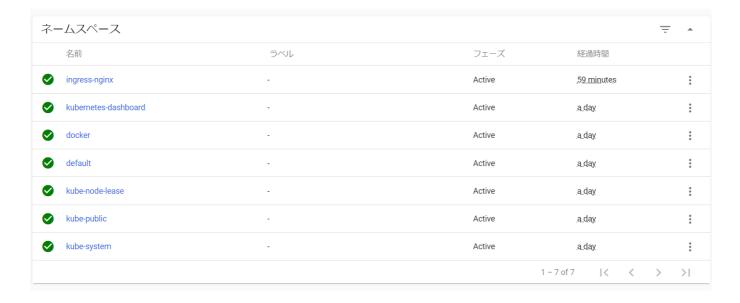
Dashbord画面で確認

- ネームスペース: kube-system を選択
- 概要をクリック



Namespace

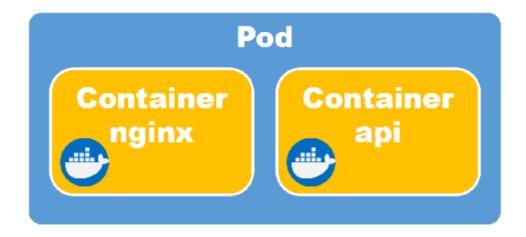
NamespaceとはKubernetesクラスタ内に入れ子となる仮想的なクラスタ



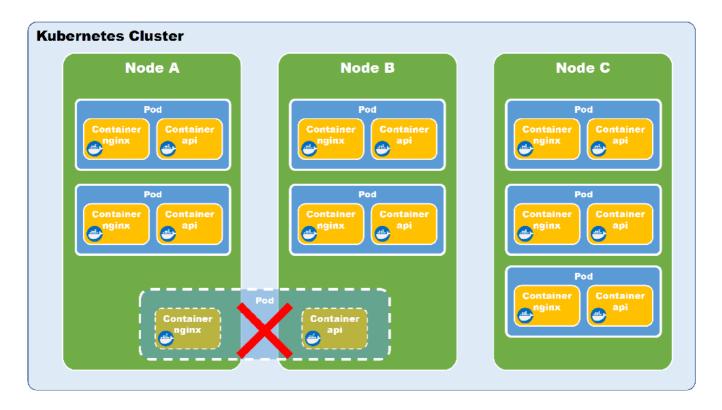
Pod

コンテナの集合体の単位で少なくともひとつのコンテナを持つ Dockerコンテナ単体、あるいはDockerコンテナの集合体

Pod単体



PodのNodeへの配置



※ひとつのPod内のコンテナが別々のノードに配置されることはない

Podをデプロイ~動作確認~削除まで

マニフェストファイル: swtest-pod.yaml

```
apiVersion: v1
                              # リソース種類を表す(Pod, ReplicaSet, Deployment...)
kind: Pod
metadata:
 name: swtest
spec:
 containers:
                              # Podなので配下にコンテナの仕様を記載する
 - name: nginx
                             # 使用するイメージ
   image: swtest/nginx:latest
                              # 必ずローカルを使用
   imagePullPolicy: Never
   env:
                             # 環境変数設定
   - name: BACKEND_HOST
                              # バックエンドのlocalhost:8080ヘフォワードする
     value: localhost:8080
   ports:
                             # コンテナポートとしてExposeする番号を指定
   - containerPort: 80
  - name: api
                            # 使用するイメージ
   image: swtest/api:latest
                             # 必ずローカルを使用
   imagePullPolicy: Never
   ports:
                             # コンテナポートとしてExposeする番号を指定
   - containerPort: 8080
```

Dashboard画面からデプロイします



- 1. 画面右上「+」マークをクリック
- 2. 「ファイルから作成」を選択
- 3. 「…」をクリックしswtest-pod.yamlを選択
- 4. 「アップロード」ボタンをクリック

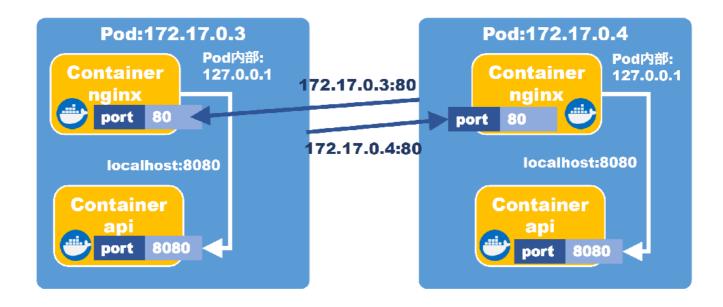
下図のようになれば正常にデプロイできています。



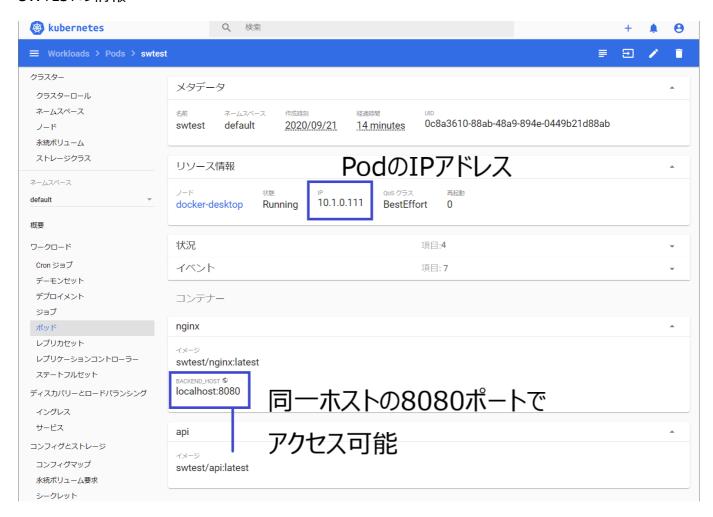
デバッグ用Podのデプロイ

debug-pod.yamlを同様にデプロイする

Pod仮想IPについて



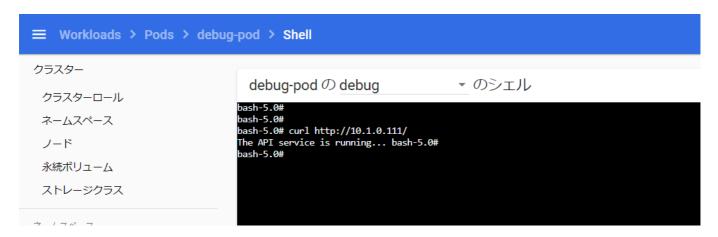
SWTESTの情報



DebugコンテナからSWTESTの動作確認



curlコマンドで確認



Podの削除

Dashboardを使ってswtestのPodを削除します。

メニューの「ワークロード」>「ポッド」を選択します。



リソースの削除

ネームスペース default の pod swtest を本当に削除しますか?



👔 この操作は次と同等です:kubectl delete -n default pod swtest



キャンセル

ReplicaSet

同一仕様のPodの複製数を管理・制御する

PodのマニフェストファイルからはひとつのPodしか生成出来ない。

これを複数同時に生成可能なのが「ReplicaSet」。

マニフェストファイルの確認

マニフェストファイル: swtest-replicaset.yaml

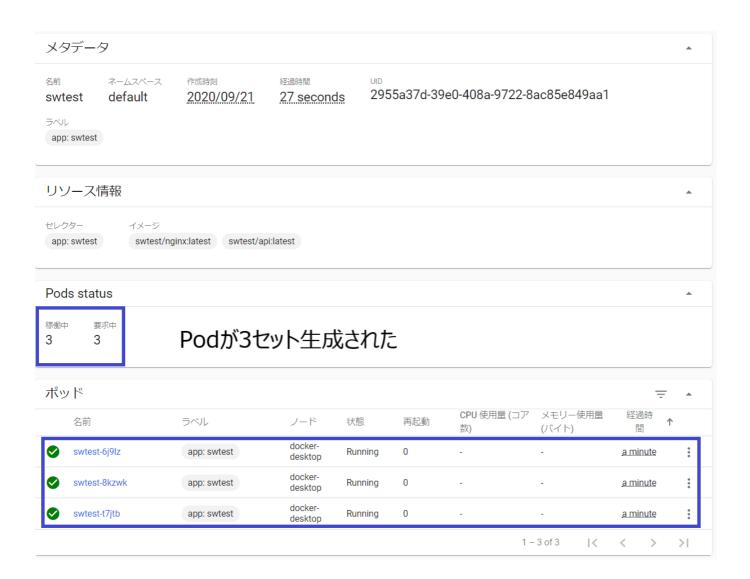
```
apiVersion: apps/v1
                         # 属性が「ReplicaSet」となる
kind: ReplicaSet
metadata:
 name: swtest
 labels:
   app: swtest
spec:
                           # 作成するPodの数を指定
 replicas: 3
 selector:
   matchLabels:
     app: swtest
                           # template以下はPodのそれと同様
 template:
   metadata:
     labels:
        app: swtest
    spec:
      containers:
        - name: nginx
          image: swtest/nginx:latest
         imagePullPolicy: Never
          env:
            - name: BACKEND_HOST
             value: localhost:8080
          ports:
            - containerPort: 80
        - name: api
         image: swtest/api:latest
```

imagePullPolicy: Never
ports:
 - containerPort: 8080

ReplicaSet生成

Dashboardからマニフェストファイルを選択し、ReplicaSetを生成します。











ReplicaSet削除

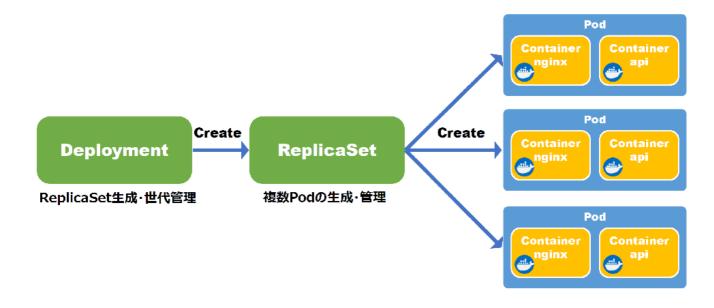
Dashboardのレプリカセットのメニューから、先ほど生成したレプリカセットを削除する。



Deployment

- **Deployment** とは、ReplicaSetの上位リソース。
- Deploymentはアプリケーションデプロイの基本単位となるリソース。
- ReplicaSetを管理・操作することができる。
- Deploymentは世代管理機能を持っておりデプロイのロールバックが可能。
- 実運用ではReplicaSetを直接用いる事は少なく、ほとんどがDeploymentのマニフェストファイルで運用している。

Deployment/ReplicaSet/Pod関連図



世代管理付のデプロイ

マニフェストファイル: swtest-deployment.yaml

apiVersion: apps/v1

kind: Deployment # ReplicaSetと異なるのはkindだけ

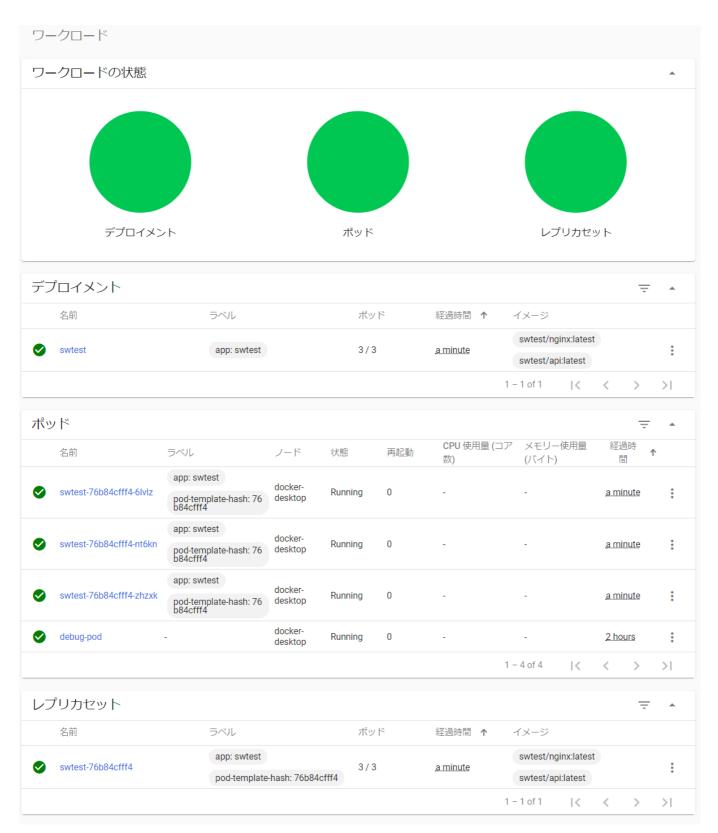
metadata:

```
name: swtest
 labels:
   app: swtest
spec:
 replicas: 3
 selector:
   matchLabels:
      app: swtest
 template:
   metadata:
      labels:
        app: swtest
   spec:
      containers:
        - name: nginx
          image: swtest/nginx:latest
          imagePullPolicy: Never
          env:
            - name: BACKEND_HOST
              value: localhost:8080
          ports:
            - containerPort: 80
        - name: api
          image: swtest/api:latest
          imagePullPolicy: Never
          ports:
            - containerPort: 8080
```

コマンドラインからデプロイする

作業フォルダより、下記コマンドを投入し、アプリケーションをデプロイする。

```
> kubectl apply -f swtest-deployment.yaml --record
deployment.apps/swtest created
```



リビジョンの確認

> kubectl rollout history deployment swtest

deployment.apps/swtest
REVISION CHANGE-CAUSE
1 kubectl.exe apply --filename=swtest-deployment.yaml --record=true

ローリングアップデートとロールバック

ローリングアップデート

アプリのダウンタイムをゼロで、新しいバージョンに順次切り替えることをローリングアップデートという。

今回swtest/apiのバージョンがv2に変更になった場合を想定したローリングアップデートを行う。

シローリングアップデート

マニフェストファイル

新バージョンのマニフェストファイル: swtest-deployment-v2.yaml

```
apiVersion: apps/v1
kind: Deployment
metadata:
 name: swtest
  labels:
    app: swtest
spec:
  replicas: 3
  selector:
    matchLabels:
      app: swtest
  template:
    metadata:
      labels:
        app: swtest
    spec:
      containers:
        - name: nginx
          image: swtest/nginx:latest
          imagePullPolicy: Never
          env:
            - name: BACKEND_HOST
              value: localhost:8080
          ports:
            - containerPort: 80
        - name: api
                                    # apiアプリバージョンがlatestからv2になった
          image: swtest/api:v2
          imagePullPolicy: Never
          ports:
            - containerPort: 8080
```

アップデートの実施

作業フォルダで下記コマンドを投入する。

```
> kubectl apply -f swtest-deployment-v2.yaml --record
deployment.apps/swtest configured
```

履歴の確認

```
> kubectl rollout history deployment swtest

deployment.apps/swtest
REVISION CHANGE-CAUSE
1          kubectl.exe apply --filename=swtest-deployment.yaml --record=true
2          kubectl.exe apply --filename=swtest-deployment-v2.yaml --record=true
```



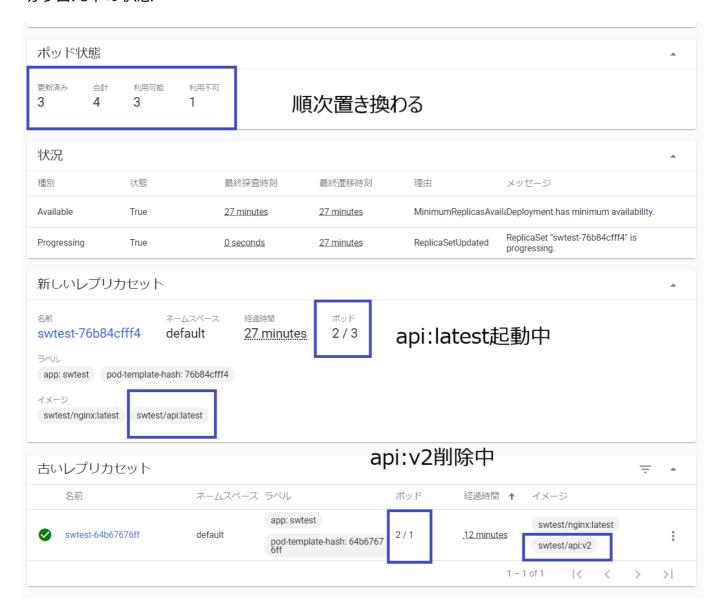
ロールバックの実施

新バージョンに何らかの問題があった場合、旧バージョンへロールバックします。

作業フォルダで下記コマンドを投入する。

> kubectl rollout undo deployment swtest
deployment.apps/swtest rolled back

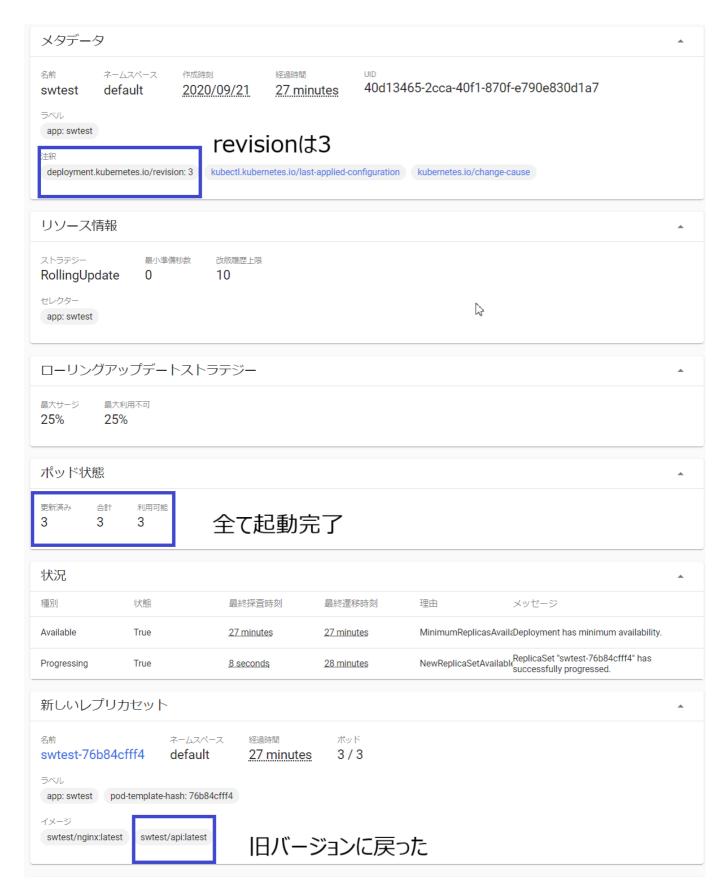
切り替え中の状態



履歴の確認

> kubectl rollout history deployment swtest

deployment.apps/swtest
REVISION CHANGE-CAUSE
2 kubectl.exe apply --filename=swtest-deployment-v2.yaml --record=true
3 kubectl.exe apply --filename=swtest-deployment.yaml --record=true



最後に削除する

> kubectl delete -f swtest-deployment.yaml
deployment.apps "swtest" deleted

Service(blue/green)作成

- Service とはPodの集合体(ReplicaSet)に対して経路やサービスディスカバリを提供
- Serviceのターゲットはラベルセレクタにより決定される

```
☑Blue/Green デプロイ パターン
```

Blue/Greenデプロイメントを実現するため、下記2つのサービス – ReplicaSetを作成します。

```
    Blueサービス → Blueデプロイメント (swtest/api:latest)
    Greenサービス → Greenデプロイメント (swtest/api:v2)
```

blue/greenデプロイメント

マニフェストファイル: swtest-deployment-blue.yaml

```
apiVersion: apps/v1
kind: Deployment
metadata:
 name: swtest-blue
 labels:
   app: swtest
                           # releaseというラベルでblue/greenを切り替える
   release: blue
spec:
  replicas: 3
  selector:
   matchLabels:
      app: swtest
      release: blue
 template:
   metadata:
      labels:
        app: swtest
        release: blue
    spec:
      containers:
        - name: nginx
          image: swtest/nginx:latest
          imagePullPolicy: Never
            - name: BACKEND HOST
              value: localhost:8080
            - containerPort: 80
        - name: api
          image: swtest/api:latest
```

```
imagePullPolicy: Never
ports:
    - containerPort: 8080
```

マニフェストファイル: swtest-deployment-green.yaml

```
apiVersion: apps/v1
kind: Deployment
metadata:
 name: swtest-green
 labels:
   app: swtest
   release: green
spec:
 replicas: 3
 selector:
   matchLabels:
      app: swtest
      release: green
 template:
   metadata:
      labels:
        app: swtest
        release: green
   spec:
      containers:
        - name: nginx
          image: swtest/nginx:latest
          imagePullPolicy: Never
          env:
            - name: BACKEND HOST
              value: localhost:8080
          ports:
            - containerPort: 80
        - name: api
                                    # 新バージョンのAPI
          image: swtest/api:v2
          imagePullPolicy: Never
          ports:
            - containerPort: 8080
```

blue/greenサービス

マニフェストファイル: swtest-servvice.yaml

```
apiVersion: v1
kind: Service
metadata:
   name: swtest-blue
spec:
```

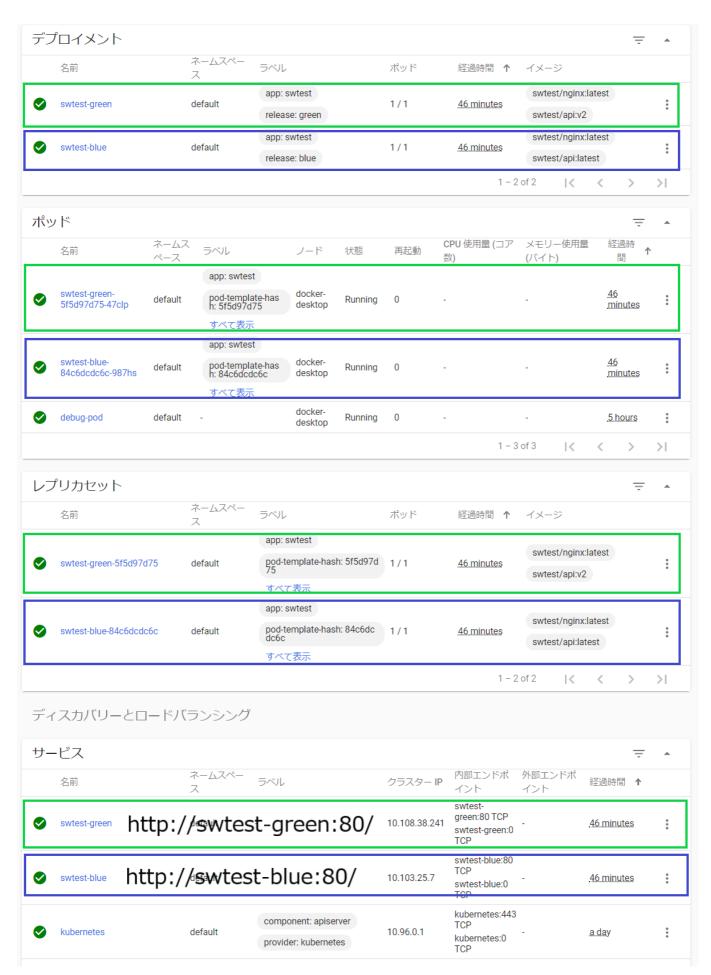
```
selector:
   app: swtest
   release: blue # release=blueのReplicaSetはswtest-blueサービス
   - name: http # httpの80番ポートをswtestに振り当てる
     port: 80
apiVersion: v1
kind: Service
metadata:
 name: swtest-green
spec:
 selector:
   app: swtest
   release: green # release=greenのReplicaSetはswtest-greenサービス
 ports:
   - name: http # httpの80番ポートをswtestに振り当てる
     port: 80
```

デプロイ

作業フォルダで下記コマンドを投入する。

```
> kubectl apply -f swtest-deployment-blue.yaml --record
> kubectl apply -f swtest-deployment-green.yaml --record
> kubectl apply -f swtest-service.yaml
```

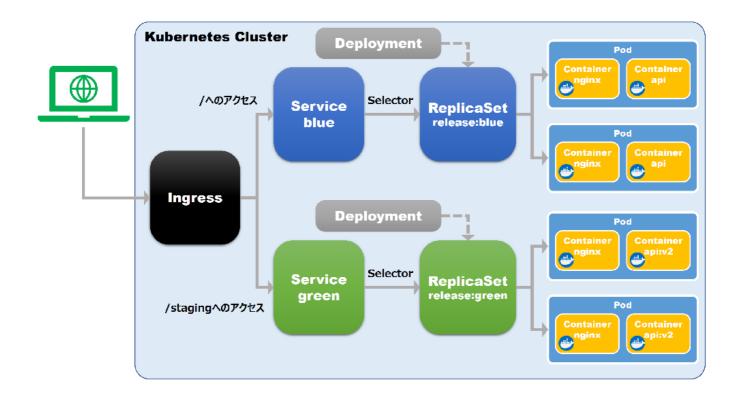
状態確認



```
debug-pod ∅ debug
                                         ▼ のシェル
bash-5.0#
bash-5.0# curl -I http://swtest-green/
HTTP/1.1 200
Server: nginx/1.16.1
Date: Mon, 21 Sep 2020 14:05:43 GMT
Content-Type: text/plain;charset=UTF-8
Content-Length: 40
Connection: keep-alive
bash-5.0# curl http://swtest-green/
The API Version 2 service is running... bash-5.0#
bash-5.0#
                                    新バージョンが応答
bash-5.0#
bash-5.0# curl -I http://swtest-blue/
HTTP/1.1 200
Server: nginx/1.16.1
Date: Mon, 21 Sep 2020 14:06:22 GMT
Content-Type: text/plain;charset=UTF-8
Content-Length: 30
Connection: keep-alive
bash-5.0# curl http://swtest-blue/
The API service is running... bash-5.0#
bash-5.0#
bash-5.0#
bash-5.0# 🗌
              現行バージョンが応答
```

IngressによるBlue/Greenデプロイ

IngressによるBlue/Greenデプロイイメージ

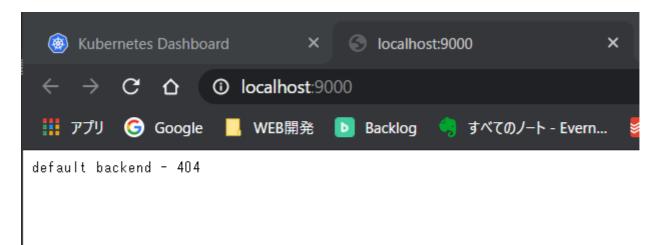


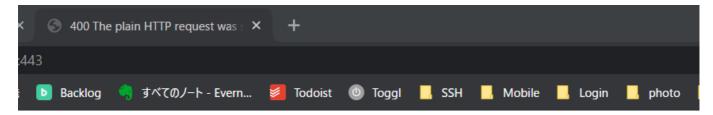
Ingress-nginxの状況確認

メニューのネームスペースから ingress-nginx を選択し、メニューの「概要」をクリックすると下記画面表示となる。



画面中の「外部エンドポイント」のURLリンクをクリックすると、下記画面が新たに開けば正常に動作している。





400 Bad Request

The plain HTTP request was sent to HTTPS port

nginx/1.13.12

Ingress追加

マニフェストファイル: swtest-ingress.yaml

```
apiVersion: networking.k8s.io/v1beta1
kind: Ingress
metadata:
    name: swtest
    annotations:
        nginx.ingress.kubernetes.io/rewrite-target: /
spec:
    rules:
    - host: swtest.api.local
        http:
        paths:
        - path: / # 現行バージョンは/でアクセス
        backend:
        serviceName: swtest-blue
```

servicePort: 80

- path: /staging

新バージョンは/stagingでアクセス

backend:

serviceName: swtest-green

servicePort: 80

作業フォルダで下記コマンドを投入する

> kubectl apply -f swtest-ingress.yaml

ingress.networking.k8s.io/swtest configured

下図のようにイングレスが追加される



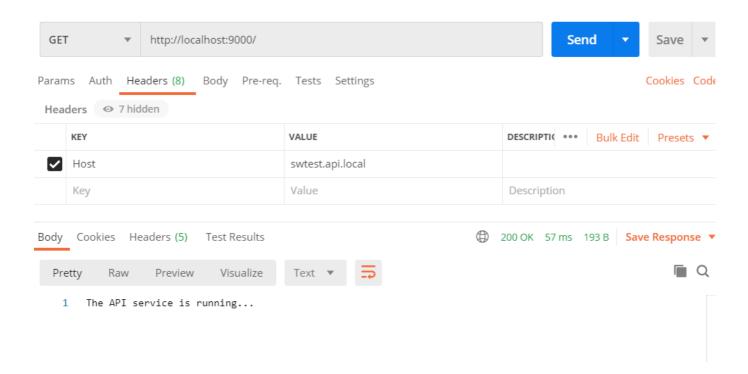
動作確認

現行バージョンへのアクセス

Postmanで動作確認を行います

- URL: http://localhost:9000/
- Headers: Host -> swtest.api.local
- 「Send」ボタンクリック

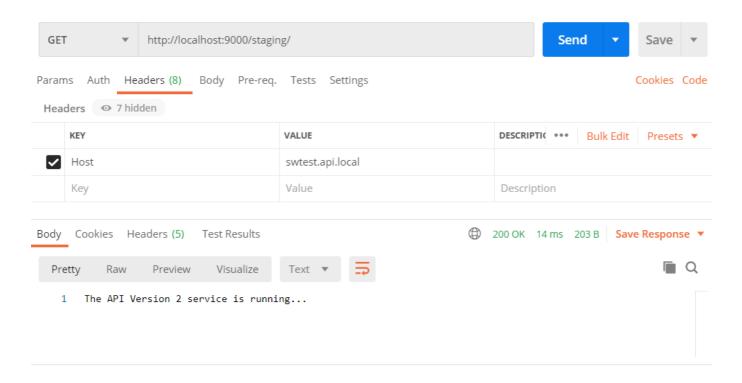
現行バージョンの応答が返る



次期バージョンへのアクセス

- URL: http://localhost:9000/staging/
- Headers: Host -> swtest.api.local
- 「Send」ボタンクリック

次期バージョンの応答が返る



Blue -> Green への切り替え

path切り替え

マニフェストファイルの「path」を入れ替えることによりGreenをリリースする



オンラインからpathを書き換えると即時にBlueからGreenにアプリケーションが切り替わる

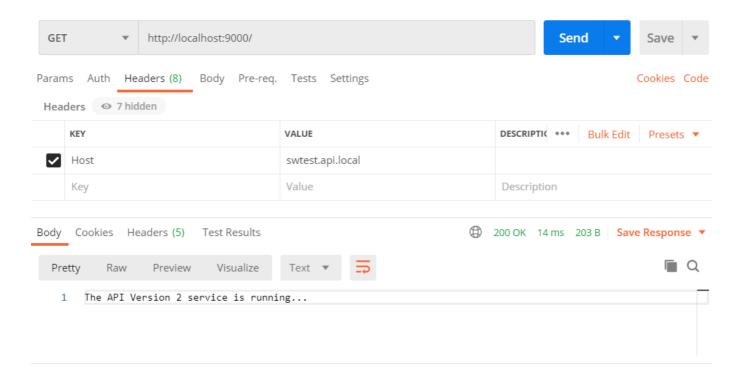


新バージョンへのアクセス

Postmanで動作確認を行います

- URL: http://localhost:9000/
- Headers: Host -> swtest.api.local
- 「Send」ボタンクリック

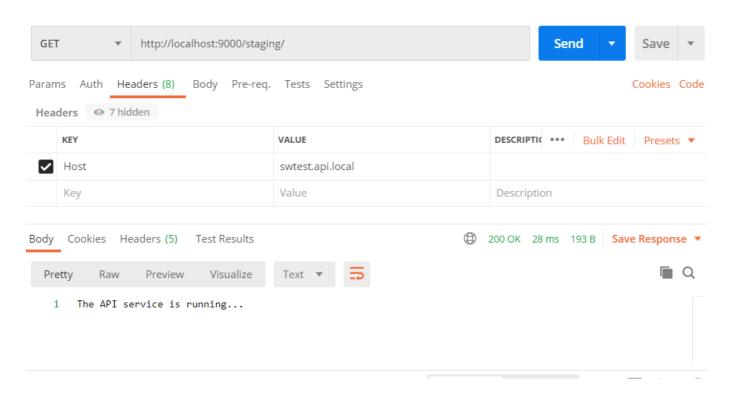
新バージョンの応答が返る



旧バージョンへのアクセス

- URL: http://localhost:9000/staging/
- Headers: Host -> swtest.api.local
- 「Send」ボタンクリック

旧バージョンの応答が返る



最後に実習環境の削除方法(できればKubernetes環境は破棄願います)

次回予定の、Apache Kafka はDocker環境で実施します。Kubertenes環境が残っていると、動作が重くなります。

出来れば次回実習までにKubertenes環境を破棄願います。

PROXYのプロセスをCtrl+Cで終了させた後、構築の逆順でリソースを削除します。

Kubertenesリソース削除

- 1. Ingress: kubectl delete -f swtest-ingress.yaml
- 2. Service: kubectl delete -f swtest-service.yaml
- 3. Deployment: kubectl delete -f swtest-deployment-green.yaml
- 4. Deployment: kubectl delete -f swtest-deployment-blue.yaml

ingress-nginx, dashboard削除

- 1. ingress-nginx: kubectl delete -f cloud-generic.yaml
- 2. ingress-nginx: kubectl delete -f mandatory.yaml
- 3. admin-user: kubectl delete -f role_binding.yaml
- 4. admin-user: kubectl delete -f create_account.yaml
- 5. dashboard: kubectl delete -f recommended.yaml

Docker Dashboardで無効化

- 1. Docker DashboardのSettingでKubertenesの有効化ボタンを元に戻す
- 2. 「Apply&Restart」ボタンを押す

不要データの削除

- 1. Docker DashboardのTroubleshootボタンを押す
- 2. 「Clean / Purge data」ボタンを押す
- 3. 削除対象のチェックを全て付ける
- 4. 「Delete」ボタンを押す

